
屋根より高く

北咲希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

屋根より高く

【Zコード】

Z6970D

【作者名】

北咲希

【あらすじ】

私は今日も屋根へのぼる 春夏秋冬、四季を通して景色を、姉弟を、友人を見つめ続けた“もの”の物語。童謡を題材にしています さて、主人公は”だれ”でしょうか。短めのオムニバス形式です。

春 その1

私は今日も屋根へのぼる。

やわらかな春の日だった。雪が溶け、秋の枯れ葉がしめつたままアスファルトに張り付いているのが分かるようになった。生命力の強い雑草は早速、我先にと地から頭をのぞかせている。黒々とした豊かな土に、まばらに散る緑。

まだ少し冷たさを秘めて、けれども暖かさをまとい始めた風に、私は心地よくなつて身を委ねた。

淡い水色の空には、うつすらと雲に身を潜める陽が照つている。ぼおつと霞むような白雲に紛れた太陽は、穏やかな光を地上に差し向けていた。

冬の匂いは、確かに残つている。しかしあと少しもすれば、裸の木々も薄緑をそつと芽吹かせるだらう。

姉が私を見てにっこりと微笑んでいる。細くて白い手を振つて、私を見送つているのだろう。陽に照らされる笑顔は明るく、晴れやかだつた。

少し強い風が吹いた。

名残惜しいけれど、今日はここまでだ。

私も姉に小さく手を振つて、出発する」としよう。

外に出るのは久しぶりだつた。

いつの間にか庭は美しい花々の住み処となつていた。そよ風が吹くと、チューリップは一斉に頭を振つた。赤、白、黄色。鮮やかな色合いの花びらでそつと蜜蜂を包みこむ。そんな頭を振りながら、

チューーリップは太陽に向かつてやわらかに揺れている。

視線を移せば、木々がほんのりと緑に身を染めているのが目に入った。ごつごつとした焦げ茶の幹に、複雑に絡み合つ梢に芽吹く青葉は爽やかに映えた。

枝葉の向こうに透ける空は青く、ふわりふわりと白い雲が穏やかに浮かんでいた。眩しすぎない日光が気持ちいい。

私は今日、初めて屋根へ上った。

濃い緑の屋根は平らかで、広かつた。淵が盛り上がつたつくりで、先日降つた雨が水溜りとして残つていた。屋根の上に切り取られた青空を覗き込めば、小さな水溜りをゆつくりと雲が横切つて行つた。ふと、隣の家を見れば、偶然に窓の外を見ていたおばさんと目が合つた。おばさんは私を見て豪快に笑つた様だつた。口がぱくぱくと動いて何かを言つた様だつたが、窓越しではその声も届かない。さて、今日はこの辺で終わりにしようか。

辺り一面が暗かった。

冷たい夜風にあてられて、私は小さく身を震わせた。しん、と静まりかえった住宅街は昼間とはまるで違う。暗闇をはらんだ路地は薄暗い。オレンジの街灯があやしく辺りを照らしているが、その灯りはかえって夜の不気味さを引き立てている様だった。向かいの空き地に生える木々の梢は闇に埋もれ、黒くて巨大な塊が林立して見える様子は、背筋にぞつとした寒気をおぼえそうなものだ。

不意に、小さな泣き声が聞こえた。

呼ばれたような気がしてその音の出所を見やれば、姉が肩を震わせて泣いていた。

どうしたの、と問いかける。

しばらくは返事がなくて、さびしい夜のじじまがより一層身に染みた。

「大好きな友達が、遠くへ引っ越しちゃう」

小刻みに揺れる肩は頬りなげで、儚いくらいの存在感に、私はいたたまれなくなる。黒くてまつすぐの髪が、姉の小作りの顔を覆い隠すように垂れている。花柄のパジャマはオレンジの街灯に照らされて、黄色っぽく光っていた。右手の袖で顔をこする姿は、抱きしめてあげたくなるほど、切ない。

「ずっと一緒にいられると思っていたのに……」

袖で零れる涙を受け止めると、乱暴に顔を拭う姉。その姉が不意に上げた視線が私の姿を捉えた。

「あれ、まだいたんだ」

驚いたように咳き、濡れた瞳で私を見つめる。私はなんとなくあまりが悪く感じて 黙つたまま、人が泣いている様子を見ていたわけだし 、ひんやりとした夜風に身をよじつた。姉は私をじつ

と見つめていたが、やがてやわらかに口元を崩して、微笑んだ。

「なぐさめてくれるの？ ありがとう。さびしいけど……でも、もう一度と会えなくなるわけじゃないんだよね」

「そうだよ。またきっと会えるよ。信じていればいつか、必ず。再会はきっと、ものすごく幸せな筈だよ。」

「そうだよね。いつまでも落ち込んだままで、泣きはらした日でなんて、明日見送ることなんて出来ないよね」

黒くて丸い瞳は、涙できらきらと輝いていて美しかった。まるで、星を浮かべた夜空のよう。

ああ、そういうえば今日は夜空を見逃してしまったじゃないか。

つまらないけれど……姉が泣きやんだなら、それでいい。

今日は、ここまで。

夏 その1

先客がいた。

何日かぶりに上った屋根には、鳥が残した糞が白い斑点を残している。何と言つたか　　ああ、そうだ。今朝の二コースで言つていた”黄砂”のせいだろつか。緑の筈の屋根は、黄色っぽく薄汚れていた。

そんなに汚れた場所であるのに、堂々とした態度で、先客は寝転がつていた。

たしか……名前は、コウヒ。

隣のおばさんがそう呼んでいたのを思い出す。

コウヒは私のことを田を細めて見てい。警戒されているのだろうか。けれど、そもそも人の家の屋根で、勝手にくつろいでいる方が悪いだろう。我がもの顔で、でんと寝そべっているコウヒはいかにもふてぶてしい態度だ。

私が少し近づくと、コウヒはのつそりと体を起こした。そして不機嫌そうな声を上げる。

「オレの昼寝を邪魔する氣かよ」

初夏の日差しに照らされて、コウヒの頭は黄金にも似た栗色に輝いている。神々しいばかりに輝くそれらとは全く異なり、うつとうしそうに私を見る顔は非常に気にくわなかつた。

腹がたつたのでだんまりを通すと、コウヒはゆくつと腰を上げた。今にも飛びかかってきたようだ。

「せつかくいい日向ぼっこだつたんだ。邪魔するな

ふしゅー、と空気が風船から抜けるような、いかにも間抜けた音がしたが、これはあくまでもコウヒが私を威嚇している証拠だ
ちつとも怖くなんてないのに。

夏の匂いを抱いた風が、やわらかに私を撫でていく。いつの間にかもう夏であるのだな、としみじみとした感慨に浸っていると、気が付けばすぐ傍にコウヒがいた。

白い前歯をちらりと見せて、コウヒは意地悪くわらつた。

「じゃあな

ああ、最悪だ。

まだ屋根に上ったばかりだったといつのこと。

どおん、と大きな音が空に轟いた。

驚いて空を見上げれば、ぱらぱらと光の粉が降りそそいできた。真つ赤な大輪の花が夜空に咲いていた。雲一つない黒々とした空には数多の星が輝いているのに、それらをしのぐ眩しいきらめき。そつと夜空に溶け込んでいく花は、きれいだった。

「花火、綺麗だなあ」

私が思つたのとほぼ同時に、溜め息混じりの少し高い声が響いた。振り返れば、思つた通りに姉だった。姉はいつもと同じく、まっすぐで黒い髪を肩あたりまで垂らし、花柄のパジャマを着て立つていた。けれど、いつもと違うのは姉に寄り添つように立つ小さな影。今日は弟も一緒に外へ出てきたらしい。

どおん、どおん。

空が、輝く。それを見つめる姉と弟の顔も、色鮮やかに照らし出される。わあ、と小さく歓声をあげる弟の瞳は、花火になんて負けないくらいきらきらしていた。姉は、そんな弟の様子を見て顔をほころばせている。

私は一度一人から視線を外し、空を見上げる。

しつとりとまとわりついてくるような闇。夜の帳は町に降り、喧噪を鎮め、やわらかな静謐が私たちを抱く そんな日常をぶち壊し、貫くよつに響く花火の音。ほの暗さを打ち碎いて、華々しく散る花火の姿。降り注ぐ光の粉は果たして、優しく瞳の中に舞いこむのだろうか。花火を見上げる人々の顔は、どれもこれも輝いている。濡れた瞳が、きらきら、と。

ふと振り返れば、ユウヒがごろりと屋根の上に横たわって、空をじっと見上げていた。今日もこいつは勝手に人の家の屋根に上つているのか。

おどかすように近づくと、今日のコウヒは珍しく大人しかった。
小さく欠伸をして、私を目を細めて見る。

「よ、お前のところの姉弟、仲いいな」

普段よりも幾分柔らかな声でコウヒが喋った。私が驚きに口を噤んでいるところ、コウヒは歯を見せて笑った。

「オレだって、なんとなくしみじみとしたくなる」とだつて、あるんだよ。たまにな」

投げやりだつたが、よく耳をこじらせて秘めた溜め息が聞こえてきそうだった。

何があつたの、と聞くとした時

じおん

一際大きく響く音。空氣の震えがここまで伝わってきたのだった。
まあ……今日はここまで、かな。

今日もまた、先客がいた。

夕暮れ時。

人波が家路を辿り始める頃。

もう少しすれば父が帰つてくるだろ？ そう思いながら壁根をのぼれば、コウヒがごろりと寝そべっていた。いい加減それを咎めるのも面倒に思い、そつと傍に寄る。

夕食の匂いを抱く風に惹かれたのか否か、珍しくぼーっとして山の方を眺めていたコウヒは、ゆつくつといつひを向いて、小さく笑つた。

「よつ。こんな時間にどうしたんだよ

姉がさびしがつていてるんだよ。……弟が風邪をひいちゃつたから。

「ああ。そういうえば弟が病気なんだって？ 結構ひどい、つてうちのばあさんが、お前んとこの母ちゃんに聞かされてたぞ」
私は驚愕に身を震わせる。何故なら、母は姉に対しては、ほんの大したことのない風邪だ、と言い聞かせていたのだから。

嘘をつくな、とコウヒを睨みつければ、大仰に肩をすくめられた。

「本当かどうかなんて、知るわけないだろ。オレの家じゃなくて、お前の家の話だ」

切り捨てるようなことをコウヒは言つたが、その口調は冷たいものではなく、むしろ温かみを感じそうに思えるものだつた。そういうえば、コウヒは弟と仲は悪くない。こいつなりに心配しているのかな、と思つ。

気だるげに横たわり、いつちを見るコウヒの瞳は、オレンジの陽光を受けて金色に輝いている。

不意にコウヒは私から視線をそらすと、はじめと同じように丘の上の

ある方角へと顔を向けた。私も黙つてそちらを見ると、ちょいちょい夕田が山影にかかつたところだつた。山際に沈んでいく夕田は驚くばかりに美しかつた。ゆるい弧を描く山際は金色に輝いている。山の向いの側から放たれる光は、空を紅く染め上げる。

オレンジにぼやける空、うすく紫がかつた空、白くほんやりとした空、まだ昼間の青を残している空。どれも同じ一つの空なのに、いろいろと変わる表情のようだ。ゆつたりと移りつっていく色合には息を呑むほど美しい。細くなびく雲は、やんわりと身を空に染めている。

田の沈んでいく今、一瞬、ほんの瞬き一つで見逃してしまつようだな、そんな移り変わつていく風景だからこそ、怖いくらいに鮮烈だつた。

「今日は随分と長くいるんだな」

コウヒがぼそりと呟いた。それはこちらの冗談だ！ という代わりに私は、姉のおかげだよ、と応えた。その返答に満足したのか否か、コウヒは曖昧な笑みを浮かべてこちらを見た。

きらきらと光る瞳。けれど、その輝き具合はさつきと全く同じものではない。今と、過去と、未来とは、違うものだから。

「こんな壮大なものがさ、オレの名前つていつのはなんだか……変な感じだなあ、と思つてわ」

コウヒがそつと零した言葉。いつもは傲慢さすらおぼえる口調は陰をひそめて、自信なさげな言葉が風に流されていく。

何かあつたの、と問えば、コウヒは小さく伸びをした。

「いや、別に。ただなんとなく、そう思つただけ。オレたちつて驚くほどちつぽけでさ、強い風が吹いただけで、あつといつ間に搔き消える灯火みたいで」

真剣さを滲ませるその声は、ひどく脆く、しかし強い力を秘めている。

「だけど、やっぱり生きているんだな、って。ぼーっとしても時間はすぎるし、気付けば今なんてあつといつ間に過去で。……話

がそれたけど、つまり……なんていうか、名前は過去につけられたのに、現在自分を支えてて……」

言ひづらそうにコウヒは顔をしかめる。普段はこれほど難しいことを言わないからだらう。慣れないとすることをしようとするからだ、と突き放したくなるが、それを上回つて、私はコウヒの言葉が聞きたかつた。

「今日さ、名前のないやつに会つたんだよ。本人は気にしてないみたいだつたけど……可哀相になつちまつて。名前を呼ばれたらオレは振り返るだろ？ それってつまり、オレがここにいるつてことです」

ゆつくつと、噛みしめるように言葉を紡ぐコウヒ。そこにはもう、迷いはなかつた。

「認められることつて、嬉しいよな。だから、どんなに自分の身には余るよつに思える名前でも、それに見合つようになりたい。認めて、オレの名を呼んでくれる人を大切にしたい、と思つてさ」コウヒの笑顔は晴れやかだつた。残光がその顔を、鮮やかに照らし出す。

「そりいえばお前の名前つて

「コウヒが思い出したよつに言つた。でも、ごめん。時間切れみたいだ。

空に、吸い込まれそうな夜だった。

冬の冷たい大気を越え、数えきれないほどの星々が街を吸い上げようとしているように思えた。重力は確かに私達を地に引きつけている筈なのに、ふわふわと天までのぼつていつてしまつうに思えるのは何故だろう。抗えそうもない力が私を、引く。

「いかないで」

小さな、震える声が、囁く。

ゆっくりと声の主を見れば、姉が小さな体躯を更に縮めるようにして、膝を抱えてしゃがみこんでいた。その震える肩の原因が、寒さのせいだけではないことは分かつていて。今夜、初雪が降るかもしれない。そう二コースが告げていたことも、分かつていて。けれど、私には姉にかけるべき言葉が分からなかつた。

「いかないでよ」

無風の夜は気味が悪いほどに寒々しかつた。物音一つしない夜。街灯よりも高い屋根のうえには不羨なオレンジの光は届かない。寝静まつた町で、けれども姉の心は鎮まることを知らないことだつて、分かつていて。けれど一体私に何が言える。いいや、何も言えやしないのだ。

私の言葉は、姉には”届かない”。

姉が気休めの言葉を必要としていることも、分かつていて。

「約束したのに。雪が降つたら一緒に雪だるま作ろうつて。入学式にはきっと、一緒に桜の門をくぐろうつて。……嘘つき、嘘つきつ！」

悲痛な叫びが夜のじじまを切り裂く。

ああ、私には何も出来ないのだ。何一つしてやれない。無力な自

分がうらめしい。

『やあ、と鈴を鳴らすような高い声が響いた。

姉が大きく肩を揺らす。『コウヒ』が姉の傍にゅっくつと寄り添つた。『ひるひる』と喉を鳴らしながら、頬を姉のパジャマにこすりつけるコウヒ。私の『元』、おずおずと顔を上げる姉の顔が映つた。

「コウヒ？ なぐさめてくれるの？ ……つづん、駄目だよ。お願いだから一人にして。悲しいのは私なの。さびしいのは私なの。確かに一緒にいたんだ、つて……この痛みが愛しいの。このままで、ずっとといたいの……だから」

ふにゃあ、とコウヒは強く鳴いたかと思うと、姉の白く滑らかな手の甲を引っかいた。止める間もないほど一瞬のことで、姉は何が起つたのか分からなかつたようつだ。ややしづらへしてから、姉はゆっくりと目を見開いた。

「コウヒ？」

震える呼び声。

コウヒは、姉の抱えた膝と胸の間にひらりと身をよじらせて、素早く潜りこんだ。そして幾分きついまなざしで姉を射る。姉はそうつとコウヒを見つめ返す。

『オレはいるよ。あいつも、あなたの笑顔が好きだつたろ』
姉がゆっくりと目を瞬いた。言葉は通じない筈なのに それなのに。

『オレはここにいるよ。今はまだ、いかないよ。だから泣くなよ。ずっとずっと一緒になんて、いられない。だけど、だからこそ、一瞬、一秒ずつが大切なんだ。オレも短い命なりに大切にしたい。最期に、幸せだった。そう言えれば、いいだろ。』

ずっと喋り続けていたわけじゃない。ただ、片言のようゆっくり、囁みしめるように話すコウヒは、私には輝いて見えた。こんなに真つ暗な夜なのに、思い浮かぶのはあの日の夕日。

こいつはきっと、血の名前を呼ぶ姉を大切に思つてくれているんだ。そう、確信する。

『あいつは幸せだったよ、姉』

「やあ、と小さく響く声。

姉がぎゅうっとコウヒを抱きしめた。小さく震える肩。その肩越しにこちりを見据えるコウヒは、やわらかな笑みを浮かべ、素早く一度 ウイinkをした。

「大好きだった ううん、大好きなの。いつだって私の後ろをついてきて。煩わしく思つた時だつてあつた。叱られる時はどんなに弟が悪くても、いつも姉が叱られる 不公平だと思つてた。でもね、だからこそ私が守つてあげられた。私には責任があつたの。真つ先に叱られ、それでも姉であり続けるつていう

溢れる思いは優しく、強く。地球上の重力は、今度は姉に向かつているんじゃないか。そう思えるほど強く引かれる。だけど

…。

「大好き、なの。そして私は幸せだった。大切だった。だから、ね。コウヒ。今日だけは泣かせてね。明日からはきっと、ちゃんと前を向いて歩くよ。笑顔で……いつまでも、姉として」

「やあ。嬉しそうにコウヒが鳴く。

けれど、その声ももつ遠い。空が私を呼んでいる。高く、高く、どこまでも昇つて。

星を散りばめた天上。弟もいるのかな、と思つ。姉が行けない場所ならば、私が会いに行こう。そして弟もきっと、笑顔で迎えてくれる筈だから。

高く、高く、空に呼ばれて。

そう 屋根より高く。

私は今日も屋根へのぼる。

また、春が巡ってきたのだ。

世界は鮮やかに色づきながら、深い眠りから目を覚ます。大空に向かつてまっすぐに立つ木々は、その両手を思いつきりあの太陽まで突き上げる。風に唄い、その身を躍らせる花々は、満面の笑みを太陽に向ける。

太陽が羨ましい。そう思つたこともあつた。しかし、結局のところ私は私のままだ。私の名を呼ぶ誰かがいる限り、私は私であり続けるだらう。そしてその誰かを大切にしたいと願うのだ。今を幸せに生きたいと、そうあることが出来るように祈るのだ。

雪が融けたての屋根はきれいな深緑だ。そしてまた、例のごとく先客はいるのだ。あたたかな日差しに、この上なく心地良さそうにまどろんでいる栗色の猫が一匹、じろりと屋根の上に転がっている。ゆつたりと揺れる長いしっぽは、風に揺れる花によく似ている。

「あ、お前か。久しづりだな」

「そうだね。姉はあれからずっと忙しくしていたから。

「だけどオレもよく頑張ったよな。本当はさ、人間を諭すようなタチじゃないのに」

あの冬の日のことを思い出して、コウヒはひどく誇らしげだった。ぴんと張つたひげがそよそよと風に揺れている。優しい春風に私は身を委ねる。やわらかな口差しに溶けてしまいそうだ。

「お前もまあ、割と頑張つたと思うよ。……知つてたんだろ？」

あの姉がお前に“会う”時は、辛いことがあつた時だつてさ

そういうコウヒこそ氣づいていたのか。そう感慨深く思つてそつと身を揺らすと、コウヒはにやあと鳴いた。

「コウヒ」

優しい声がコウヒを呼ぶ。嬉しそうに身を起こし、コウヒは姉に飛びついた。それを見て破顔する姉。ああ、良かった そう、し みじみと思つ。久しぶりに会つた姉は少し大人びていて、けれどもあの頃とほとんど変わらない笑顔をしていた。この笑顔を見るたびに、泣きじやくつていた弟もまた、つられて笑顔になるのを私は知つていた。まるで、太陽のようだと思つ。人を惹きつけ、大勢に笑顔を向けられ、支えられている。

ぎゅうとコウヒを抱きしめていた姉が、思いがけなくこっちを見た。どきん、と身を強ばらせる。しかし、その必要はなかつた。

「ありがと」

何に対しての感謝なのか。……いや、そもそもこれは私に向けられたものなんか分からなかつた。けれどもすぐに私を見て微笑む姉は美しく、日の光を浴びて輝いていた。

「ここにいれば空が近いでしょ。あの天にいるのかな、って思つたら、少しでも高い場所にいたくつて。私達屋根が大好きだつたし。それここからなら、吹けば”想い”も届くかな、と思って」

姉はそう言つて、ポケットから緑の小さな棒を引っ張り出した。よくよく見れば先端は王冠のような形をしており、中は空洞で突き抜けていた。そうしてもう一つ、ピンクの小さなボトルを引っ張り出した。

「お母さんが買つてくれて。さびしかつたり、悲しいときはいつも、大きいのを一つだけ。”想い”を吹き込んで風に流すの。どうか届けてください、つて」

姉はそう言いながら、ボトルから黄色い蓋を剥がしとつた。そして緑色のストローをボトルの中にそつと差し入れる。

「いつもブランドからが多かつたから。それにすぐに消えちゃうのを見るのはさびしいからつて色々と混ぜ物をしてみたけれど……やっぱり終わりまで見届けたいし。だから今日は久しぶりに屋根の上から。ほら、あの花火の日と 初雪の日以来の」

何度も出し入れしたストローをそっとボトルから引き抜くと、姉はそれをくわえた。ゆっくりと息を吹き込めば、姉の”想い”が膨れ上がる。日の光を浴びて七色に光る。

不意にストローから離れると、優しい春風に抱きこまれた”想い”は、ゆつたりとその場を漂つた。

歌が、聞こえた。

花が風にそよぐ音ではなく、優しく澄んだ声で。

ああ、私の名を呼んでください。大切に”想い”から。

しゃーぽん玉飛んだ。屋根まで飛んだ。
屋根まで飛んで……更に、高く、高く。
あの、空まで。

了

春 再び（後書き）

ここまで読んで下さり、本当にありがとうございました。
何か書きたい、と思い立ち、一時間で書き上げ、推敲しながらの
投稿でしたので……様々な不備はあると思います。
けれど、少しでも楽しんで頂けたなら幸いです。
主人公が”もの”なので大変でした。
情景描写、心理描写の練習に、とも思つて書いた作品です。批評・
感想お待ちしています。

一月二十日 北咲 希

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6970d/>

屋根より高く

2010年11月14日09時37分発行